「生まれてきてくれて、ありがとう ― 助産師からのメッセージ ―」

お腹の中の赤ちゃんの様子を診察するときは、医師も私たち助産師もいつも厳粛な気持ちになります。新しい生命を授かったこと自体がすでに奇跡のようなものですから、何よりも、その生命に元気に出会えるようにすることが最優先です。そのために、妊婦さんも私たちもさまざまな注意を払って赤ちゃんの誕生に備え、日々全力を尽くします。そういう毎日を繰り返していくと、生まれてくる子が男の子か女の子かということなどはとても小さなことにすぎなくなり、もっと大きなものと向き合っているような気がしてきます。

出産が近づくと、入院です。私たち助産師は、お母さんとお腹の中の赤ちゃんの様子を絶えず確認しながら、赤ちゃんが生まれ出てくるのをひたすら待ちます。生まれるまでは、一瞬たりとも気が抜けません。母と子の二つの命を預かっているのですから、どんなに経験を積んでいても毎回が真剣勝負、出産は命がけです。「お母さんも頑張っているから、赤ちゃんも頑張って、生まれてきて。」と、心の中で赤ちゃんに声をかけます。

そして、いよいよその時が訪れます。元気な赤ちゃんの産声で、それまでの緊張が一気に解けるその瞬間に、お母さん、私たち、そして、その場にいるみんなが笑顔と幸せ

に包まれます。「生まれてきてくれて、ありがとう。」そんな思いで胸がいっぱいになり、目の前の赤ちゃんに心から感謝します。

生まれたばかりの赤ちゃんは小さくて、抱き上げると首がくにゃくにゃしていて壊れてしまいそうなくらいですが、ずっしりと確かな重みがあります。

私が助産師になろうと思ったのは、看護学校の学生時代に、産婦人科病棟で実習をしたときの感動が忘れられなかったからです。この生命誕生の瞬間の感動は、何度経験しても変わることがありません。

お母さんの中に宿った小さな命が、お腹の中で何か月もかかって成長することの不思議さ。それを周囲のさまざまな人が支えて、この世に誕生する生命。時が満ちて生まれてくる赤ちゃんの誕生は、神秘的で、どうやっても人間が入り込めない世界があるような気がします。人の一生の中で、この世に生まれるというのは、たった一度だけのことであり、今生きているすべての人が、皆等しく通ってきた道です。私は、助産師として、その貴重な瞬間に立ち会うことの責任と喜びをいつも感じながら仕事をしています。

そして、退院の日、「周囲の人に感謝して、これからたくさんのことを吸収して元気に大きくなっていってね。」と心から願いながら、大切な宝物を病院から送り出しています。

【人権教育プログラム】（学校教育編　平成二十年三月）から転載